「貧困化」を『資本論』で再学習する

建交労は旧全日自労以来、一貫して「失業と貧乏と戦争に反対」してたたかってきた。この誇るべき歴史と伝統について『資本論』に立ち戻ってその意義を再学習する。なお、『資本論』の引用は（④p〇〇→新版第4分冊、page〇〇）と記している。学習テキストは「マルクス主義経済学講座・上」の補論」であるが、現局面の統計数字はその変化等を補う必要がある。

１．「貧困化」とは「だんだん貧乏になる」ことではない

　マルクスは「貧困化」という用語を使っていないが、『資本論』において有名な「一方の極における富の蓄積は、同時にその対極における、すなわち自分自身の生産物を資本として生産する階級の側における、貧困、労働苦、奴隷状態、無知、野蛮化および道徳的堕落の蓄積である」（④p.1126）と「貧困」にふれている。さらに、別の個所では、「‥貧困、抑圧、隷属、堕落、搾取の総量は増大するが‥」（④p.1332）ともいっている。前者は、「貧困化」の一般的な指標を総合し、あるいは「貧困」を代表している。後者は、歴史的な傾向、「いわゆる本源的な蓄積」における定式化である。後者では、とくに搾取の増大（労働日の延長や機械の資本主義的利用、労働強化の指標など）に触れていることに注目すべきとされている。

　ここで「貧困化」のことばを敢えて詮索するのは、「貧困化」を字義どおり、「だんだん貧乏になる」とする「理解」が常識化し、普及させられているかである。こうした「貧困化」を「貧乏化」と一面化し、矮小化する思想攻撃とたたかうためには、「貧困化」を貧困・労働‥‥などの蓄積、貧困‥‥搾取の増大として、全面的に把握することが重要であるからである。（傍線はryo）

　エンゲルスは、『イギリスにおける労働者階級の状態』（1845年）において「労働者階級の状態は、現代のあらゆる社会運動の実際の土台であり、出発点である」と述べている。

　同様にレーニンも労働者階級の状態を正しく認識することは、「あらゆる空想や幻想を片

付ける」といい、「失業、低賃金、栄養不良、飢餓、資本の苛酷な規律、淫売、召使数の増加などのことばは、労働者大衆を憤激させる宣伝材料をあたえ」（｢わが党の綱領草案｣）、労働運動・革命運動の出発点といっている。

２．生産性向上運動と「貧困化」論争

　「貧困化」論争とは、マルクス主義の資本蓄積論に対する攻撃とそれに呼応する「修正主義者」に対する理論闘争のことである。(テキスト1971年初版である)

第2次大戦後、国際的な「貧困化」論争は、アメリカの「生産性向上運動」のともに始まった。日本でも、「生産性向上運動」とその実行のための「貧困化」否定の思想攻撃として開始された。この時期は「神武景気」（1955年～1957年）とかさなり、「生産性向上」→「賃金上昇」→「生活水準の向上」→「貧困化否定」が攻撃の定式化であった。

1955年、日本生産性本部が発足し、経済同友会は「鶏が育たなければ卵はとれない。鶏の育成を拒否して卵を要求し続ければ、やがて卵を産まなくなる」と宣伝した。

　1956年、日経連は「すでに実質賃金が戦前の賃金水準を上回り、相対的にも絶対的にも貧困化するというのは、あまりにも事実に反するご都合主義的な主張である」と攻撃を行っていた。

　このように、日本における生産性向上運動は、戦前からひきつがれた遅れた搾取形態のうえに、アメリカ的な新たな搾取形態が持ち込まれ、あらたな「合理化」運動として、特別にきびしく労働者階級のうえに襲いかかっていたのである。そして修正主義者たちは、「マルクスの貧困化論は古くさくなった」「再検討すべきである」と一斉に同調し始めたのである。

３．「貧困化」否定論への批判

「生産性の向上が生活水準を上昇させる」という独占資本の攻撃にたいして、何よりも生活の実体を具体的に明らかにする有効な批判が展開なされた。具体的には、「生活水準」をあらわす指標－物価、家賃、賃金、労働条件）について、統計数字を利用するものだった。

第1に、生産性が向上するということは、生産過程における労働者に何をもたらすかという直接の問題である。生産性向上がイコール生活水準上昇はすり替えである。すなわち、「資本主義体制の内部では、労働の社会的生産力を高めるいっさいの方法は、個々の労働者を犠牲にして行われるのであり、生産を発展させるいっさいの手段は、生産者の支配と搾取との手段に転化し、労働者を部分的人間へと不具にして部分人間へと切り縮め、なし。彼を機械の附属物へとおとしめ、引き下げ、彼の労働苦によってで労働の内容を破壊し、科学が自立的力能として労働過程に合体される程度に応じて、労働過程の精神的力能を労働者から疎外するのであり、またこれらの方法・手段は、彼の労働条件をゆがめ、労働過程のあいだはあまり細かいところまでこだわる悪意に満ちた専制支配のもとに彼を服従させ‥、」（④p.1125）ている。こうして労働の苦痛、労働災害、職業病、そして労働への不満、反抗、生活不安などとなって現われ、労働者と家族の生活全体が悪化させられているのである。

第2に、「生活水準」を消費水準にすり替えてしまう狙いは、資本主義制度その基本的特徴から、労働者の目をそらすことにある。消費水準の引き上げ、すなわち賃上げと消費の引き上げは労働者を「貧困化」の運命から開放しないからである。すなわち、労働者が、「自分の享楽の範囲を拡大し、自分の衣食や待遇が改善され、〝特有財産〟が増えても奴隷の従属関係と搾取がなくなるのではないのと同じように賃金労働者のそれもなくならない。資本の蓄積の結果としての労働の価格の騰貴は、実際には、賃労働者がみずからそれまでに鍛え上げていた金の鎖の長さと重さが、いくらかその張りのゆるみを許す、ということを意味するにすぎない」（④p.1080）からである。鎖をたち切ることが、自らを開放し、資本主義的蓄積の法則ら自由になれることが根本なのである。

第3に賃上げによって「貧困化」からまぬがれるかのような主張もあやまりである。マルクスはいう。「資本が蓄積されるにつれて、労働者の報酬がどうあろうと―高かろうと低かろうと―労働者の状態は悪化せざるをえないということになる」（④p.1126）と。

資本主義的生産における労賃は、それが労賃である限り、支払い労働部分を表わすのであり、不払労働の搾取の結果にすぎない。「剰余価値の生産または貨殖が、この生産様式の絶対的条件である。」（④ｐ.1080）

マルクスは賃金闘争に対して、「公正な賃金」という保守的なスローガンかわりに、「賃金制度廃止」という革命的な旗印をかかげよといっている。（『賃金、価格、利潤』）

第4に労働者の状態を二つの側面から捉える重要性である。資本家が消費生活から「貧困化」を否定していることは前述のとおりである。他方、マルクスは、労働者の「生産・労働過程」にまず目を向けている。それは「生産・労働過程」が労働者の生活の主要な側面であり、そこに資本主義的生産の秘密を暴露し、剰余価値の理論を発見し、マルクス経済学の体系が確立しているからである。

それでは、マルクスは労働者の消費生活をどう見ていたかである。

「労働者の行う消費生活には二種類がある。生産そのものでは、かれは生産手段を自分の労働によって消費し、それを前貸し資本の価値よりも大きな価値ある生産物に転化させる。これはかれの生産的消費である。他方では、労働者は労働力の代価として支払われた貨幣を生活手段にふりむける。これはかれの個人的消費である。だから、労働者が行う生産的消費と個人的消費はまったくちがうである。第一の消費ではかれは資本家の動力として行動するのであって、資本家のものとなっている。第二に消費はかれ自身のものであって、生産過程の外でいろいろな生活機能をおこなう。一方の消費の結果は資本家の生活であり、他方の消費の結果は労働者自身の生活である。」

第一の労働者の個人的消費は、「生産過程のたんなる付随事にすることを強制されている」「このようなばあいには、かれは自分の労働力を働かせておくために自分の生活手段をあてがうのであって、ちょうど蒸気機関車が石炭や水をあてがわれ、車輪に油をあてがわれるようなものである。‥これは、資本主義的生産過程にとって本質的ではない一つの乱用としてrあらわれる」

　「労働者は自分の個人的消費を自分自身のために行うのであって、資本家を喜ばせるために行うのではないということは、少しもことがらをかえるものではない」

　生産をうばいかえすことによってのみ、生活と真人間をうばいかえすことができる。

第5にマルクスは生産過程の労働者の状態を問題にしているわけではない。労働者の労働と生活のすべての側面を捉えることによって、労働者の「貧困化」の状態が、全面的に明らかにされるのである。

マルクスは、絶対的剰余価値や相対的剰余価値の生産の諸篇で、職場における労働者の状態を明らかにしてきた。貧困化を例解した。「労働者階級の過半」をなす部分の食物、健康（病気）、衛生、住宅（広さ、部屋数、寝室や性問題）、家賃、燃料、給水、排水、汚物処理、日光、空気、無知、堕落、私生児、自殺、死亡、犯罪‥‥明らかにしているのである。

（修正主義者の貧困化論は略）